

朝の読書の効果に関する議論について

一朝の読書関係単行書における説明の分析一

葉袋 秀樹
(筑波大学)

【要旨】

本研究の目的は、朝の読書に関する単行書から、朝の読書の効果に関する説明を抽出し、これまで論じられてきた朝の読書の効果の内容を体系的に整理することである。朝の読書に関する単行書 17 点を収集し、「効果」「可能性」等の用語を含む見出しがあり、5～10 項目を挙げている説明を抽出し、項目と説明の内容を比較・検討し、体系的に整理した。その結果、その意義として、朝の読書の効果を包括的に捉えようとしていること等、問題点として、具体的な根拠が示されていないこと、表現方法が不統一であること等を明らかにした。また、朝の読書の効果に関する説明を 17 項目に分類し、読書活動の直接的な効果に関する 10 項目と、派生的な効果に関する 7 項目の 2 つのグループに分け、統一した表現方法で示した。

1. 序論

(1) 研究の背景

朝の読書とは、小・中・高等学校で、朝の授業開始前に 10 分程度、教師と生徒全員が教室で自分の読みたい本を読む読書活動である。1988 年 4 月千葉県私立船橋学園女子高校（現東葉高校）で全校一斉に始まった。それを担ったのが同校教員の林公氏と大塚笑子氏である。1993 年に、同校の実践を報告した『朝の読書が奇跡を生んだー毎朝 10 分、本を読んだ女生徒たち』（船橋学園読書教育研究会編著、高文研）が出版されてから、マスコミで報道され、広く知られるようになった。10 分間行う学校が多いことから、「朝の 10 分間読書」と呼ばれ、略して「朝読書」とも呼ばれる。朝の読書の方法として、「朝の読書の 4 原則」（みんなでやる、毎日やる、好きな本でよい、ただ読むだけ）が知られている¹⁾。現在、小学校の 75%、中学校の 76%、高等学校の 42%で朝の読書が行われており²⁾、朝の読書を行っている学校では、生徒の読書量や生活態度に変化が認められているが、最近、朝の読書は「風化しつつある」³⁾という意見もある。

朝の読書に関しては、林公氏をはじめとする朝の読書を推進する人々の考え方や意見、実践報告を掲載した多数の単行書（参考文献リスト参照）が出版されており、朝の読書の意義や効果（以下、効果という）、方法、実践例について詳しく知ることができる。

これらの単行書では、朝の読書の進め方に関する事項と効果に関する事項がしばしば混ざり合った形で論じられているため、それぞれの内容を把握することは必ずしも容易ではない。朝の読書の効果に関する理解を深めるには、両者を分離し、過去に遡って整理することが必要である。朝の読書の効果に関する説明は、これまで数回項目にまとめられているが、それを整理した文献はなく、その全体像は理解しにくい。

筆者は、これまで、朝の読書に関する単行書の解説付きリストを作成し⁴⁾、朝の読書の

進め方に関する説明を抽出して体系的に整理し⁵⁾、朝の読書の効果に関するアンケート調査や感想文のリストを作成した⁶⁾。また、2008年には、朝の読書に関する雑誌記事について、著者、発行年、掲載雑誌等の傾向を分析した⁷⁾。

朝の読書の効果のうち、学力への影響については、学力調査データをもとに実証的な検証が行われ、その結果が報告されている⁸⁾。今後、朝の読書の効果の他の側面について検証するには、その前提として、朝の読書の効果に関する議論の内容を整理する必要がある。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、朝の読書に関する単行書に記載されている朝の読書の効果に関する説明を抽出し、それをもとに、これまで論じられてきた朝の読書の効果の内容を体系的に整理することである。

本研究では、朝の読書に関する単行書 17 点を収集し、それを通読して、朝の読書の効果に関する一定のまとまりのある説明を抽出する。章・節等のまとまりがあり、「効果」「可能性」等の用語を含む見出しがあり、5～10 項目を挙げて説明しているものを対象とする。次に、項目と説明の内容を比較・検討し、体系的に整理する。特に時期による変化について注目する。

効果に関する項目と説明が備えるべき要件としては、第一に、理論的に明快で、説得力があること、第二に、誰にでもよくわかる平易なものであること、第三に、項目全体でさまざまな効果を包括的に示すものであること、第四に、朝の読書の現状を評価する際に比較・対照しやすいものであることの 4 点が考えられる。なお、朝の読書の効果には、教師にとっての効果も考えられるが、それは別に論じたい。

2. 朝の読書の目的

朝の読書の効果に関する説明について検討する際には、朝の読書がめざす目的を考慮する必要がある。このため、朝の読書の目的について検討する必要がある。

1990 年代後半から、朝の読書は、読書教育に関する本で紹介されてきた。朝の読書を一つの項目として紹介している図書には、『子どもを本好きにする読書指導 50 のコツ』⁸⁾、『子どもの読書活動をどう進めるか』¹⁰⁾、『新・こどもの本と読書の事典』¹¹⁾、『子どもの未来をひらく自由読書 - 関心をひきだす読書指導のコツ』¹²⁾などがある。これらの本では、朝の読書は、読書教育の関係者によって、主に読書指導や読書活動の方法の一つとしてとらえられており、社会でもそのように理解している人々が多いと思われる。

(1) 林氏の考え方

林氏の考え方はこれとは異なっている。林氏は、4 点の単行書で、朝の読書の目的について、次のように説明している。なお、下記では、単行書の書名の後に参考文献リストの番号と出版年、引用文の後に掲載ページを付記する。

林氏は、『朝の読書実践ガイドブック』(③1997)では、「もともとその実践は、本を読む子を育てたくて始めたわけではないのです」「子どもたちに元気がない。子どもたちを元気にできることは何だろう。(中略)唯一効果があったのが「朝の読書」だったのです。」(22)と述べ、『心の教育は朝の読書から』(⑤1998)では、「実は「朝の読書」の目的は子どもたちみんなが本を読めるようになることではないのです。(中略)みんな仲良く助け合いながら生きていけるような人間になることこそが「朝の読書」の究極の目的なのです。」(23)、

「私たちは「朝の読書」を読書指導や成績向上のために始めたものではありません。」(27)
「私たちは読書指導をしようとしたわけではありません。今日の前で悩み苦しんでいる生徒たちに生きる力を与えたい。(中略)「本を読ませよう」と思ったわけでもありません。生きる力を身に付けるための多くの手立ての一つとして、たまたま本を読ませることがあったにすぎません」(34)、「受験勉強に疲れ、勉強嫌い、学校嫌いになっている高校生たちに、今を生き抜く力を身に付けてほしいと願ったからでした」(66)と語っている。

『子どもの学ぶ力を伸ばす「朝の読書」』(⑩2006)では、「この複雑きわまりない社会で、(中略)自分の力で生き抜いていくために覚えておいてほしい、いくつかの大切なことを知らせるためなのです」(37)、「子どもたちに襲いかかっている深刻な事態に(中略)自ら直接対決する力をつけてもらいたいという願いから、「朝の読書」にたどり着いたのです」(39)、『朝の読書—その理論と実践』(⑪2007)では、「(ほとんどの教師に)学校を一人ひとりの生徒が生き生きと生活できる場にしたい」という思いがありました」(157)と述べている。

(2) まとめ

朝の読書は、しばしば読書指導の方法の一つとして挙げられているが、林氏がめざしたものは、子どもが、元気を出して、仲良く助け合いながら、今の社会を生き抜いていく力、すなわち、生きる力を身に付けることであり、読書はあくまで手段である。朝の読書の方法や内容は、この本来の目的と結びついているのであるから、本来の目的を十分理解しないと、方法や内容の理解も不十分に終る恐れがある。

3. 主要文献に見る朝の読書の効果

朝の読書の効果に関する説明から、先に述べた条件(1章(2)参照)に適合する文献を5点(参考文献リスト③⑤⑥⑬⑰)抽出した。いずれも林氏の著作である。文献ごとに、説明の概要(見出しと解説の要約)を示し、次に、内容と表現方法に分けて考察する。

(1)『朝の読書実践ガイドブック』(③1997)(文献1)

1) 概要

「第2章「朝の読書」がもたらす効果」では、7項目が挙げられ、次のように説明されている。

ア. 本を読めない子が読めるようになった

読書が嫌いな子が読書が好きになる。本を読む楽しさを知り、本の持つ魅力に目覚める。

イ. 朝の10分間が有効に使えるようになった

騒がしい時間が静かに本を読む時間変わった。これについて、学校に静寂の時間がよみがえることによって、子どもたちが自分との対話をできるようになるという江藤淳氏の意見が挙げられている。

ウ. 遅刻が減り、ホームルームに集中し、授業にスムーズに入れる

遅刻の減少は、毎朝自分が楽しいと思う読書から学校生活が始まるためと思われる。

全員が、本を読んで落ち着いた精神状態になっているため、ホームルームが静かになり、集中できる。

エ. 集中力が付き言語能力が伸びる

読書に集中できるようになってくる。授業に対する集中力が高くなる。読み、考え、理解し、想像し、書けるようになったという生徒の意見が挙げられている。

オ. 生活のスタイルが変わる

日常生活の中で本を読む時間が増えた。図書館、書店へ行き、本を探すようになった。

カ. 豊かな心と人間関係が育つ

心が落ち着き、和やかになり、人の痛みがわかり、思いやりの心が生まれたという生徒の意見が挙げられている。

家族や友人との本に関する対話が増え、本を貸し借りし、交友関係が広がる。

キ. その子なりの成長、自信と誇り

生徒一人一人が必ず成長する。読む本の内容が向上する。物の見方、考え方、人格面で成長する。共生感、連帯感が育つ。人間、社会を知り、自分に目覚める。成長に気づいた生徒に自信と誇りが生まれてくる。

2) 内容

第一に、第2章の初めに「朝の読書によって生徒たちはどのように変わったのでしょうか」とあるように、生徒への影響の観点から説明されており、教師の観点が見られない。

第二に、「ア. 本を読めない子が読めるようになった」が挙げられ、最初に読書の普及が挙げられている。

第三に、「イ」以下では、読書の普及以外の効果が多数挙げられている。これは、生きる力を身に付けるという目的の観点から捉えられている。

第四に、「ア. 本を読めない子が読めるようになった」などの具体的な行動から、「キ. その子なりの成長、自信と誇り」などの内面的な領域まで、広い範囲にわたる多様な効果が挙げられており、測定が困難な抽象的なものも含まれている。

第五に、効果の内容に関する具体的な根拠が示されていない。これらの項目とその説明の根拠は、林氏の経験と朝の読書の実践校の教師からの報告であるが、報告の掲載文献やアンケート調査の結果等の具体的な根拠は示されていない。

第六に、ホームルームへの集中が「落ち着いた精神状態」の影響として捉えられており、影響関係が示されている。

3) 表現方法

見出しと説明の表現方法に一貫性が不足しており、次のような問題点がある。

- ・イの見出しの「朝の10分間が有効に使えるようになった」には具体性がない。説明には、読書を行ったことと静寂が得られたことの二つが含まれており、見出しで具体的に示す必要がある。
- ・ウの見出しの「遅刻が減り」と「ホームルームに集中」の原因と考えられる「落ち着いた精神状態」は説明にはあるが、見出しには見られない。
- ・エの見出しには、「集中力」と「言語能力」の二つが含まれている。説明には、読書に対する集中力、授業に対する集中力、言語能力の伸長の三つが含まれている。
- ・オの「生活のスタイルが変わる」の見出しは抽象的で、どのように変わったかは、説明には示されているが、見出しには示されていない。
- ・カでは、「豊かな心」と「人間関係」の二つが含まれているが、生じた結果のみが示されており、そのもととなるものが示されていない。
- ・いくつかの項目では、1項目に複数の事項が含まれている。各項目の現状をチェックする際には、1項目で1つの効果が示されている方が扱いやすい。また、可能であれば、

効果に至る影響関係を示すことが望ましい。

(2)『心の教育は朝の読書から』第2章(⑤1998)(文献2)

「3 「朝の読書」が学校教育の中で果たす役割」で、全校一斉実施の意義について、項目に分けて説明している。この中には、朝の読書の効果と考えられるものが含まれているため、その項目のみを紹介する。ただし、効果としてではなく、果たすべき役割として説明されている。

1) 概要

ア. なぜ、全校一斉なのか

③一人一人の生徒を動かすためである。

最も読書意欲の低い生徒も読書をするように、読むきっかけを与えることである。

イ. なぜ、毎朝10分間か

②10分間は読書が苦手な生徒が我慢できる限界である。③毎日の積み重ねが確実に力を伸ばす。④基本的生活習慣の崩れを正す。⑤習慣の力の偉大さを認識する。

ウ. なぜ、好きな本なのか

①自主性、主体性を身につけられる。②その時自分に必要なものを選べる、学べる。③自分の力に合ったものを選べる。④自分の個性に合ったものを選べる。⑤教師の味方を、生徒の数だけ、本の数だけ、教室に引き入れることができる。

⑤は、生徒が選ぶ図書の内容は人類の知恵の結晶であり、生徒はそれを読んで学習できるため、図書の数だけ、生徒の数だけ、本の著者である一流の人々を教室に招待することになるという意味である。「教師の味方」は図書の著者を指している。

エ. なぜ、読むこと以外に何も求めないのか

③生徒に自分を見つめる余裕を持たせる。⑤他者との人間関係をより深く豊かにする。

2) 内容

イの②～⑤、ウの①～⑤は文献1には見られない。イとウを含んでいる点で、この文献は重要であり、これを含めて考える必要がある。アの③は文献1のアに関連している。エの③「自分を見つめる」は、1のイの「自分との対話」に関連し、⑤「他者との人間関係」は、文献1の力に対応している。

3) 表現方法

見出しは疑問文の形式であるため、わかりやすい見出しが必要である。

なお、この文献の内容はこれ以後の文献にも何回か掲載されているが、ほぼ同内容のため、以下では省略する。

(3)『心の教育は朝の読書から』第3章(⑤1998)(文献3)

「第3章「朝の読書」が切り拓く新しい可能性」で説明されている。朝の読書を経験した生徒の感想の中に、「朝の読書」の継続による作文力、表現力の向上についての自覚」が非常に多く見られることが示されており、書きたいことが自分の言葉で書けるようになったという生徒の意見が紹介されている。文献1のような包括的な形では、朝の読書の効果について説明されていない。生徒の意見の紹介はほとんど同じであるが、「作文力、表現力の向上」という形でまとめられている。

(4)『心を育てる朝の読書』第2部第1章(⑥1999)(文献4)

第1章の「(2)「朝の読書」がもたらしたもの」で、次の8項目が挙げられている。各項

目の下の説明は、文献1と同じ部分が多いので、文献1と異なるもののみを示す。

1) 概要

ア. 静寂と集中の時間の確保

朝の読書の時間が静寂と集中の時間となる。

イ. 他の活動への波及効果

10分間の静寂と集中がその前後に及ぼす波及効果がある。

遅刻が減り、ホームルームが静かで落ち着いた雰囲気になり、授業にスムーズに入れ、集中力が高まる。

ウ. 本を読む能力の伸長

本を読む時間が取れない生徒に本を読む時間を確保できたことが付け加えられている。

エ. 学力の向上

読み、考え、理解し、想像し、書けるようになったという生徒の意見が挙げられている。

オ. 日常生活の変化

カ. 豊かな心と人間関係が育ちます

キ. 人間的な成長

ク. 教師に与える影響

教育の可能性を信じるようになる。自信を与え、元気になれる。

2) 内容

第一に、見出し項目は、文献1とほとんど同じであるが、説明では、一部に新しい説明が付け加えられている。見出し項目には、「ク. 教師に与える影響」が追加され、教師の観点からも説明されている。

第二に、最初に、「ア. 静寂と集中の時間の確保」が置かれ、文献1のイの説明の「静かに」の意味が掘り下げられている。これによって、読書の持つ「静寂と集中」という本質的な特徴が明確にされている。他方、「ウ. 本を読む能力の伸長」は、説明に新しい内容を加えた上で、1番目から3番目に移っている。

第三に、「イ. 他の活動への波及効果」で、「静寂と集中」の「波及効果」として、「遅刻が減り、ホームルームが静かで落ち着いた雰囲気になり、授業にスムーズに入れ、集中力が高まる」が挙げられている。

第四に、具体的な根拠が示されていない。この点はこれまでと同様である。

3) 表現方法

- ・「イ. 他の活動への波及効果」では、文献1のウの見出しにあった遅刻の減少、ホームルーム・授業への集中が説明に移り、見出しは抽象的な表現になっている。
- ・「エ. 学力の向上」では、文献1のエの見出しの「言語能力」が「学力」に変わり、「言語能力」は、見出しから説明に移っている。
- ・オ、カ、キは文献1とほぼ同じである。

(5) 『すぐできる朝の読書実践マニュアル[小学校編]』(⑬2003)(文献5)

冒頭の「子どもが変わる、学校が変わる」で説明されている。文献3とほぼ同文である。見出しは文形式である。各項目の下の説明には、一部新しい内容が付け加えられている。

エ. すべての子どもの学力が向上します

言語能力が学力の土台を形成する。朝の読書で基礎学力の低下を補うことができる。

オ. 日常生活に好ましい変化が出てきます

生活が規則正しくなる。

- ・エの説明で、言語能力が学力の土台を形成し、基礎学力の低下を補うと述べている。見出しでは「学力が向上」と述べているが、あくまで土台や基礎の充実による向上である。
- ・「オ. 日常生活に好ましい変化」の見出しは抽象的であるが、説明は「生活が規則正しくなる」ことである。

(6)『朝の読書—その理論と実践』(⑩2007) (文献6)

第3章の「なぜ、「すべての学校」なのか」で、下記の7項目が挙げられている。「今なぜ「朝の読書」を日本のすべての小・中・高校に実施してもらう必要があるのか」という問いに対する答えとして説明されている。朝の読書の効果ではなく、朝の読書が必要な背景について述べている。従来のものよりもかなり簡単である。

1) 概要

ア. 情緒の安定

喜怒哀楽の感情をコントロールできるようになるには、読書による感情的な体験の積み重ねが最も適切である。

イ. 学力の土台

情緒の安定と言語能力の獲得が基礎学力の基礎である。読む力を身に付けるには、一定の読書量が必要である。

ウ. 人との出会い

読書によって、さまざまな人と出会い、さまざまな生き方や考え方に接する。

エ. 差がない

自分の好きな本を読むだけであるから、どの子どもも公平に学ぶことができる。

オ. 自立への道

読書を通じて、自立の精神が育つ。自ずから、自己発見、自己創造へ発展する。

カ. 生活を豊かに

読書習慣が身に付くと、読書を生活の一部、生きる喜びとも感じるようになる。

キ. 希望を未来に

読書力を持った生徒には、希望を本という形で手渡していくことが可能である。

2) 内容

文献1～5と比べて、より広い範囲にわたる抽象的な内容である。見出し項目には、読書の普及そのものや静寂と集中、読書時間の増加等の読書の直接的な結果に関する基本的な事項がなく、朝の読書との関連も示されておらず、読書の間接的な影響が中心になっている。これは、この記事が、朝の読書の効果ではなく、朝の読書が必要となる背景を論じているためである。ここでは、読書一般の意義が論じられているが、朝の読書とは結び付けられていない。読書一般の抽象的な意義としては優れており、そのようなものとして受けとめるべきである。特に、「オ. 自立への道」では、「読書を通じて、自立の精神が育つ」と述べ、「カ. 生活を豊かに」では、読書を「生きる喜び」と捉え、「キ. 希望を未来に」では、本を「希望」と捉えており、読書一般の意義にとどまっている。読書一般の意義としては優れている。

新しい項目として、「ア. 情緒の安定」「ウ. 人との出会い」「エ. 差がない」がある。「ア.

情緒の安定」を得る手段として、新たに読書による「感情的な体験の積み重ね」を、「ウ. 人との出会い」では、読書によって、「さまざまな生き方や考え方に接する」ことを、「エ. 差がない」では、「どこに住んでいても、公平に学ぶことができること」を、それぞれ挙げている。学力については、見出しは、「学力の向上」ではなく、「学力の土台」となり、「基礎学力の基礎」として捉えられ、その要因として、新たに「情緒の安定」が加わっている。

3) 表現方法

全体として、見出しが簡単になり、説明も短くなっている。

4. 朝の読書の効果に関する議論の整理

(1) 議論の整理の方法

1) これまでの文献の意義

第一に、広範囲にわたるさまざまな事項が挙げられており、朝の読書の効果を包括的に捉えようとしている。第二に、一部を除いて、それぞれの文献で、新しい視点から検討されている。第三に、文献6では、文献1～5よりも広い観点から捉えられており、時間の経過と共に、派生的な影響へ視野が広がっている。これらを総合することによって、これまで挙げられてきた項目を包括的に捉えることができる。

2) これまでの文献の問題点

文献1～6の全体に関する問題点として、次の点を挙げることができる。

① 一部で生徒の意見を引用していることを除くと、効果の根拠が示されていない。② 見出しには、本を読むという具体的な行動に関する項目と人間的な成長という抽象的な内容の項目があり、両者は区別するべきである。③ ひとつの見出しに複数の事項が含まれている。文献1のウ、カ、文献3のカなど。④ 重要な事項が、見出しに含まれず、説明にとどまっていて、見出しが十分内容を表していない。文献1のイ、エ、オ、文献3のイなど。⑤ 「すべて」という言葉が用いられている場合とそうでない場合がある。⑥ 見出し項目には、名詞形のものと同動詞形のものがあり、統一されていない。

3) 整理の観点

これまでの文献の説明を活かし、問題点に対処するために、下記の方針を定めた。

- ① これまでに挙げられた項目を、できるだけ生かして、体系的に整理する。
- ② できるだけ、一つの命題で一つの事項を表現する。
- ③ 重要な事項は、説明にとどめず、見出しに含める。
- ④ 読書活動の直接的な効果と派生的な効果を区分する。
- ⑤ 「すべて」「ほとんどすべて」という言葉は避ける。
- ⑥ 見出し項目は動詞形で統一する。

(2) 議論の整理の結果

このような観点から検討した結果、下記の17項目に分類することができた。読書活動の直接的な効果に関する10項目と、派生的な効果に関する7項目の2つのグループに分類できた。カッコ内には、文献の番号とその中での項目の番号を付記して、出典を示してある。

1) 直接的な効果

- ① 静かな環境の中で読書ができ(1-イ、4-ア)、読書に集中できる(1-エ、4-ア)。
- ② 静かな環境で読書するため、自分と対話することができ(1-イ、2-エ③)、落ち着いた

精神状態になる（1-ウ）。

- ③ 遅刻が減り、ホームルームが静かになり（1-ウ、4-イ）、集中できる（1-ウ）。
- ④ 授業にスムーズに入れ（1-ウ、4-イ）、授業に対する集中力が高まる（1-エ、4-イ）。
- ⑤ 自分が必要とする、自分に合い、自分が読める本を選ぶため（2-ウ②③④）、それぞれの生徒が自分に必要なことを学ぶことができる（2-ウ②、6-エ）。
- ⑥ 毎日 10 分のため我慢でき（2-イ②）、積み重ねが力になる（2-イ③）。
- ⑦ 読書が嫌いな生徒が本を読むようになり、読書が好きになる（1-ア、2-ア③、4-ウ）。
- ⑧ 日常生活の中で読書時間が増え、図書館・書店に行き、本を探す機会が増える（1-オ、4-オ）。
- ⑨ 言語能力（読み、理解し、考え、想像し、表現する力）が身に付く（1-エ、3、4-エ、5-エ、6-イ）。
- ⑩ 生徒間に共生感、連帯感が生まれ（1-キ）、周囲の人々との間に本に関する対話が増え、本の貸借を通じて、人間関係が広がる（1-カ、2-エ⑤、4-カ）。

2) 派生的な効果

- ① 感情の体験を積み重ねることによって、感情が統御され、情緒が安定する（6-ア）。
- ② さまざまな生き方、考え方に接し（6-ウ）、社会を知り（1-キ）、自分に必要な知識や経験を入手できる（2-ウ⑤）。
- ③ 安定した情緒（6-イ）と言語能力が基礎学力の土台を形成する（5-エ、6-イ）。
- ④ 規則正しい生活習慣の形成に役立つ（2-イ④⑤、5-オ）。
- ⑤ 本を自分で選ぶため、自主性、自立の精神を身に付けることができる（2-ウ①、6-オ）。
- ⑥ 心が落ち着き、人の心の痛みがわかり、思いやりが身に付く（1-カ、4-カ）。
- ⑦ 以上をもとに、人間的に成長し、自分に自信と誇りを持つようになる（1-キ、4-キ）。

文献 3 の「ク．教師に対する影響」、文献 6 のカ、キ以外の項目は取り入れている。

この 17 項目は、単行書の解説から導き出した仮説である。単行書の説明の根拠となっているのは、これまでの朝の読書の実践において、生徒が語った感想、生徒が書いた感想文、生徒に対するアンケート調査の結果等と考えられる。これらの項目の内容は、今後、生徒の読書感想文の内容、生徒に対するアンケート調査の結果、朝の読書関係の文献の内容（主に教員側の認識）、心理学など関連分野の知識と比較検討して検証する必要がある。朝の読書の意義を包括的に調査するには、これらを含めて検討する必要がある。

おわりに

朝の読書の考え方には、このほかに、「朝の読書の 4 原則」の持つ意味、学校教育に対する独自性の二つの効果がある。これらについても、今後研究を進めたい。

注記・引用文献

- 1) 長倉美恵子編『子どもの読書活動をどう進めるか』教育開発研究所、2003、pp. 81-82（浅野真紀子執筆）
- 2) 平成 22 年 7 月 30 日現在。朝の読書推進協議会調べ。
- 3) 「「朝読運動」活性化探る」『中国新聞』2009 年 9 月 13 日 塩見裕子広島県立広島皆実高校教諭の話「朝読が風化しつつあるとの危機感がある。」

- 4) 葉袋秀樹「朝の読書にどう取り組むかー基本文献と具体的な指針」(『教職研修』35(6)、pp. 94-97、2007)
- 5) 葉袋秀樹「朝の読書にどう取り組むか(3)ー具体的な指針の解説①②③」(『教職研修』35(8)、pp. 98-101、2007) (『教職研修』35(9)、pp. 98-101、2007) (『教職研修』35(10)、pp. 96-99、2007)
- 6) 葉袋秀樹「朝の読書にどう取り組むか(2)ー実践報告の活用」(『教職研修』35(7)、pp. 94-97、2007)
- 7) 葉袋秀樹「朝の読書に関する雑誌記事の分析ー朝の読書に関する議論の変遷と特徴ー」『日本生涯教育学会第29回大会発表要旨集録』p. 17、2008)
- 8) 山崎博敏編著『学力を高める「朝の読書」』メディアパル、2008、79p.
- 9) 上條晴夫「朝の10分間読書」『子どもを本好きにする読書指導50のコツ』学事出版、1996、pp. 13-16
- 10) 長倉美恵子編『子どもの読書活動をどう進めるか』教育開発研究所、2003、pp. 80-83(浅野真紀子執筆)
- 11) 黒澤浩ほか編『新・こどもの本と読書の事典』ポプラ社、2004、p. 203(森洋三執筆)
- 12) 笹倉剛『子どもの未来をひらく自由読書ー関心をひきだす読書指導のコツー』京都、北大路書房、2004、pp. 159-163

参考文献

- ①船橋学園読書教育研究会編著『朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1993、189p.
- ②林公+高文研編集部編『続朝の読書が奇跡を生んだ』高文研、1996、221p.
- ③林公『朝の読書実践ガイドブックー日10分で本が好きになる』メディアパル、1997、79p.
- ④佐藤愛『家庭から広がる朝の読書』メディアパル、1998、79p.
- ⑤林公『心の教育は朝の読書からーできることから始めよう』メディアパル、1998、79p.
- ⑥林公編著『心を育てる朝の読書ー10分間朝読書で、子どもが変わる、学校が変わる』教育開発研究所、1999、289p.
- ⑦大塚笑子『朝の読書ははじめの一步ー生徒と共に歩みながら』メディアパル、1999、79p.
- ⑧大塚笑子『朝の読書希望への一步ー教育に生かす朝の読書』メディアパル、2000、79p.
- ⑨林公『朝の読書の原点を求めてー生きる力を育む授業』メディアパル、2000、111p.
- ⑩岡山県落合町立落合中学校「朝の読書」推進班編『「朝の読書」が学校を変える』高文研、2001、135p.
- ⑪穴見嘉秀編著『「朝の読書」がもっと楽しくなるアイデア集ー読書交流で感動を共有する』学事出版、2001、159p.
- ⑫朝の読書推進協議会編『朝の読書46校の奇跡ー私たちはこのように「朝の読書」に取り組んだ』メディアパル、2001、115p.
- ⑬林公編著『すぐできる朝の読書実践マニュアル[小学校編]ー子どもが変わる、学校が変わる』小学館、2003、130p.(教育技術MOOK)
- ⑭吉田法子『先生、いっしょに本を読もうよー「朝の読書」が教えてくれた言葉の力、本の力、子どもの力』メディアパル、2004、111p.
- ⑮朝の読書推進協議会編『「朝の読書」はもうひとつの学校ー子どもたちと歩んだ17年の軌跡』メディアパル、2005、109p.
- ⑯林公『子どもの学ぶ力を伸ばす「朝の読書」ー自ら考え、自ら学ぶ意欲を育てる』メディアパル、2006、109p.
- ⑰林公『朝の読書ーその理念と実践』リベルタ出版、2007、231p.